

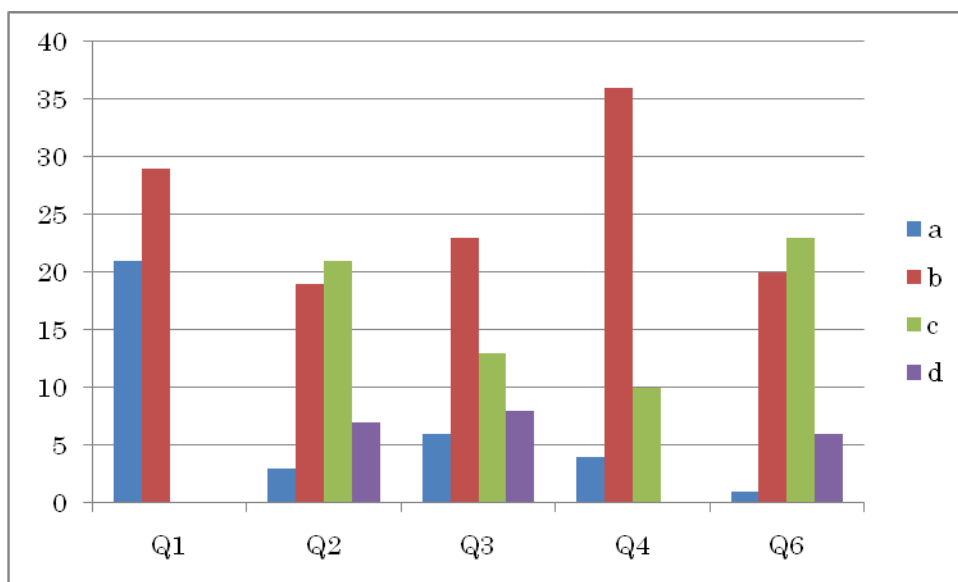
みんな DE 実践 報告書			
タイトル	“ちがい”と“つながり”を感じよう！！		
実践者	古賀 慎二 愛知淑徳大学文学部教育学科 4 年		
場 所	愛知淑徳大学	対象者と人数	学生 50 人
実践教科や担当時間		実践時間数	1 時間
ねらい	action につながるようにする。 “ちがい”と“つながり”を体感し、それらを面白いと感じられる		
準備物	① 模造紙 6 枚(グループ分)、②マッキーペン 6 個、③「地球の食卓」の写真、④カンボジアクイズの問題、⑤テープ		
本時の展開			
時	生徒の学習活動	●教師の留意点	
導入 10 分	① アイスブレイキング ・仲間探し・仲間壊し お題に沿って同じ仲間を探す インタビューに答える ・四季、好きな教科、 ※最後に 8 人グループにする。	●生徒が多くの人と交流ができるように話しやすい雰囲気を作る。 ●インタビューの際に、「ちがい」や「つながり」という言葉を用いて、「ちがい」と「つながり」について意識させる。	
展開 70 分	② カンボジアクイズ チームごとに机を向い合せにして座る ・チームでクイズに答える。 ③ 「地球の食卓」でフォトランゲージ ・グループごとに「地球の食卓」の写真を見て、気づいたところや疑問に思ったところを書く。 ・気づいたところや疑問に思ったところ、国をグループごとに発表する。 ・多文化共生の説明を聞く。 ④ 外国人住民・児童の悩みを	●チーム対抗戦にして、場を盛り上げる。 ●クイズ後に、説明を付け加える。 ●机間巡視して、生徒が発見できるように見方や着目するポイントについて助言する。 ●日本と違うところや国の特徴などを発表後に補助説明する。 ●難しいという意識が生まれないように簡単に多文化共生について説明する。 ●身近なことから考えるように助言する。	

	<p>考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の体験談を聞く。 ・グループごとに話し合う。 ・代表者が発表する。 	
終末 10分	<p>⑤ 自分たちができる action を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに話し合う。 ・代表者が発表する。 	<p>●難しいことから考えずに、できることは沢山あるということを助言する。</p>
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化に対する意欲の増進 授業後のコメントシートに「異文化を学んでみたい」や「語学を勉強してみたくなった」という感想が多くあった。特に、カンボジアクイズと「地球の食卓」フォトランゲージは活動自体が楽しく気づいたら終わっていたという声が多かった。 ・多文化共生や外国人住民について考える機会となった 多文化共生という言葉自体知らない学生もいたため、考える機会となった。また、外国人住民に関わったことのない学生に関わったことのある学生や実際に悩みや困っていることについて考えることによってより身近に感じたり、見方が変わったりした。 	
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキングや「地球の食卓」フォトランゲージでのファシリテーターの役割 アイスブレイキングの「仲間壊し・仲間探し」では、立ち上がって活動するため学生がやる気を出したように見えたが、人数が 50 人多いためか全体的に動きが悪かった。また、インタビューする際に恥ずかしがる学生や話しながらいない学生がいて、話す学生が集中していた。そのような時にファシリテーターとして言葉がけや場の雰囲気作りが必要であったと感じた。 また、「地球の食卓」フォトランゲージでは気づいたことや分かったことを書くのに結構な時間がかかった。書く人や話す人も限られていたため、見る視点や考える視点などのヒントを出すことができればもっと有意義な時間になったのではないかと考える。 	
実験者の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての開発教育の授業、また同じ年代である大学生に向けての授業ということもあって緊張してしまいました。正直、授業的には失敗してしまいました。しかし、事前事後に行ったアンケートの結果の通り、開発教育の授業をすることによって異文化に対する興味・関心が出てきたり、外国人住民の見方を変わったりする学生が出てくるなど手ごたえもありました。この経験でわかったことを来年からの教育に活かしていきたいです。 	

授業前アンケート

本実験授業の効果を計るため、授業前と授業後にアンケート調査を実施した。対象者は、「入門ボランティア」を受講している50名の学生である。異文化と触れ合ったことや外国人住民と接したことがあるなどの異文化経験の有無の把握のため学生50名を対象として5項目の選択肢質問と2項目の自由記述のアンケートを行った。

資料6 授業前アンケート



(1) Q1の「海外に行ったことがある。」の問いに対して、「b いいえ」は、29人で、「a はい」の21人より多かった。

(2) Q2の「多文化共生という言葉を知っている」の問いに対して、「c 言葉だけ知っている」が22人、「b 少し知っている」が19人、「知らない」が7人、「a よく知っている」が3人となった。

(3) Q3の「あなたが生活している地域で、外国人住民と顔を合わせることはありますか。」の問いに対して、「b ときどきある」は23人、「c あまりない」は13人、「d 全くない」は8人、「a よくある」は6人となった。

(4) Q4の「外国人住民は、日本の行動様式に合わせるべきだ。」の問いに対して、「b どちらとも思わない」は36人、「c 思わない」は10人、「a そう思う」は4人となった。

(5) Q5の「外国人住民に関するイメージをお答えください。」の問いに対して、プラスイメージ(明るい、面白いなど)は25人、マイナスイメージ(何を考えているかよく分からない、怖いなど)は20人、無回答は5人となった。

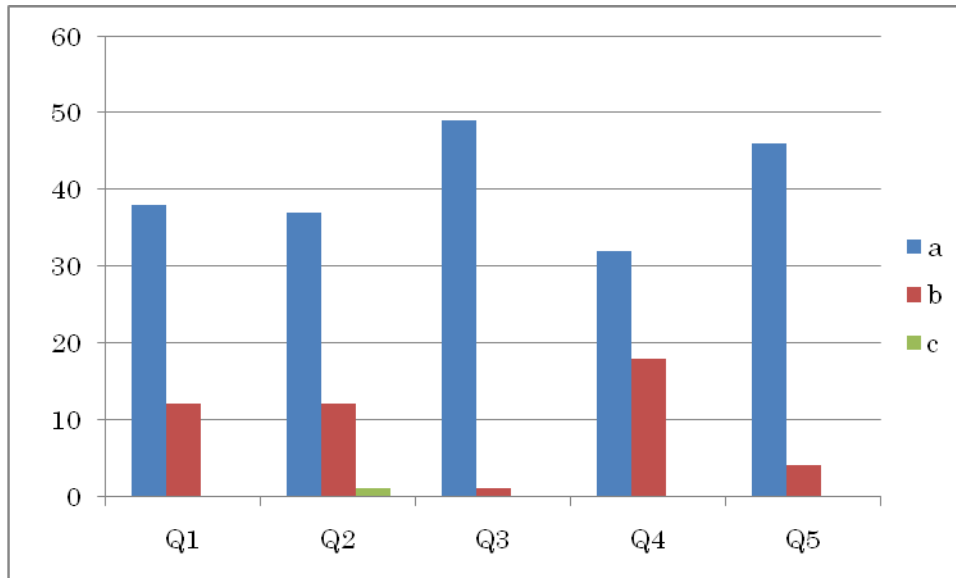
(6) Q6の「地域で暮らす外国人住民にどの程度親しみを感じますか。」という問いに対しては、「c どちらかと言えば感じない」は24人、「b どちらかと言えば感じる」は20人、「d 感じない」は6人、「a 親しみを感ずる」は1人となった。

(7) Q7の「人と違うことについてどう思いますか。」という問いに対しては、プラスイメージ(違って当たり前など)は48人、マイナスイメージ(疎外感があるなど)は2人となった。

授業後アンケート

授業のねらいの達成と、開発教育を受けてどのような気づきがあったか見るため5項目の選択質問と2項目の自由記述のアンケートを行った。

資料7 授業後アンケート



(1)Q1 多文化共生についてよくわかった。

「a わかった」が38人、「b ややわかった」が12人であった。

(2)Q2 授業を受けて、“ちがい”と“つながり”を面白いと感じることができた。

「a できた」が37人、「b ややできた」が12人、「c あまりできなかった」が1人であった。

(3)Q3 授業を受けて、もっと他の文化を知りたいと思った。

「a はい」が49人、「b いいえ」が1人であった。

(4)Q4 授業を受けて、外国人住民のイメージが変わった。

「a はい」が32人、「b いいえ」が18人であった。

(4) - ②Q4 - ②「はい」と答えた人は、どのようなイメージが変わったか、お答えください。

プラスのイメージ(もっと関わりたいと思ったなど)…32人

(5)Q5 授業を受けて、今後何かactionをしてみたいと思った。

「a はい」が46人、「b いいえ」が4人であった。

(5) - ②Q5 - ②「はい」と答えた人は具体的にどのようなactionか、お答えください。

語学勉強…5人

海外に行って文化や習慣を学ぶ…10人

あいさつから始める…10人

話す・交流する…18人

ボランティアに参加…3人